



しゅごキャラ！二次創作
失っても残るもの

はなび

イクあむであむが記憶喪失

「あむ、大丈夫？」

「うう……。前、見えない……」

山積みの布を抱えた亜夢を、心配そうにりまが覗き込む。

「なんで、今日に限って男手がないのよ……」

はあ、と亜夢はため息を洩らした。

「唯世もなぎも、家の用事だから、でしょ？」

「そ。でも、今日中に買っといてって、先生が」

「だからって、なんであたしが……」

「じゃんけんに負けたから」

ぼそっと亜夢が呟けば、りまとややは声を揃えてそう言ったのだった。

文化祭用の布を、ガーディアンメンバーで購入することになったのだが、唯世は家族で食事、なぎひこは、知人の祝賀会で舞踊を披露しなければならない、とのことで、亜夢とりま、そしてややの3人で買い出しをすることになったのだ。

「あむ、そこ電柱あるから。気をつけて」

「はい」

そう、返事をした矢先のことだった。

「!？」

「あむっ!!」

山積みになった布で前方が見えなかった亜夢は、目の前にあった電柱に激突してしまった。電柱のそばには、それまで亜夢が持っていた布と、それに下敷きにされるように亜夢が倒れている。

「あむちーっ！」

りまはややは、慌てて布を掻き分けて亜夢に声をかける。

「あむ、あむっ」

「……ん」

薄らと、亜夢の目が開いた。ほ一、と安堵の息が漏れる。

「大丈夫、あむち？」

「……」

なにも答えずに、亜夢は打ったであろう額を押さえた。

「あたし……」

次に発した亜夢の言葉に、りまとややは驚きを隠せなかった。



「記憶喪失？」

亜夢の母・緑の言葉を、幾斗は思わず復唱してしまった。

「たぶん、一時的なものだろう、とは言われたんだけど……」

はあ、と息を吐きながら、緑はそう言った。

「あむは、今……？」

「部屋にいるわ。よかったら、声をかけてあげて？ あの子、ずっと窓の外を見てるのよ」

幾斗は会釈をして、亜夢の部屋へ向かった。

コンコン、とノックをすると、すぐに、はい、と亜夢の声が返ってきた。深呼吸をして、ゆっくりとノブを回す。幾斗を見て微笑む亜夢は。なにも、変わりがないのに。

「こんにちは」

「……ああ」

そこに、記憶がないことは。口を開くまでわからない。

「あなたは？」

「……イクト」

「イクトさん？ 高校生？」

慣れない響きが、くすぐったくて。思わず、目を伏せてしまいそうになった。

「イクト、でいい。そう、呼ばれてた」

「年上なのに？ あたし、呼び捨てにしてたんだ？」

はは、と亜夢は笑う。こういうふうに、笑顔を見せる女だったか、と幾斗は自分の記憶の中の亜夢と照らし合わせた。

外見は、亜夢なのに。中身は、まるで別人のようだ。

「覚える人が多くて大変。昨日と今日とね、学校の友達だっていう子が来たんだけど。王子様みたいな男の子とか。あ、テレビで見た女の子も来たんだよ」

亜夢が言うのは、きっと。

「……唯世と歌唄？」

「そう、唯世くんと歌唄ちゃん。イクトさん……じゃなくて、イクトも知ってるの？」

幾斗は、ゆっくり頷いた。それを確認して、そっか、と呟いた亜夢は、窓から空を仰ぐ。

「……なにか、あるのか？」

亜夢に近づいて、幾斗は亜夢と同じように空を眺めた。

「なにもないよ。でもね、なんとなく。あたし、いつもこうやって、誰かを待ってた気がするの」

「……え？」

亜夢の言葉に、幾斗は目を丸くした。

「誰っていうのはわからないんだけど。いつもね、こうして……、空を眺めて。大切な人が来るのを、待ってた気がするの」

「……」

「あたしの気のせいかもしれないんだけどね」

はは、と笑いながら、亜夢は幾斗を向いた。すると、すぐに亜夢の視界が塞がれてしまう。

「い、イクト……？」

亜夢は、大きく目を見開いた。なぜ、今幾斗の腕の中にいるのか。理解、できない。

「……来るさ」

「え？」

そっと、幾斗は亜夢から離れて、まっすぐに亜夢を見据える。

「きっと、来る。だから……、待ってろ」

「……うん」

真剣な幾斗の表情に。亜夢は、素直に頷いてしまった。



「きれいな月……」

亜夢は、懲りもせずまた空を仰いでいた。そうしていると、すぐく落ちて着いて。それから。

「……イクト」

なぜか、頭から幾斗のことが離れなくて。窓からの来訪者は、もしかしたら彼なのかもしれない、と直感で思ってしまった。

窓を閉めて、亜夢は部屋の電気を消すとベッドに潜った。

——待ってろ。

「……うん」

幾斗の言葉を思い出して、また頷いてしまう。きっと、彼が来る。彼に、来てほしい、と。亜夢の心が、そう言っている。

かたん。

「……？」

物音がして、亜夢は身体を起こした。暗がりの中、佇んでいる影が見える。

「……イクト？」

影で、そう感じてしまった。ああ、と幾斗の低い声が部屋に響いて、安心する。

「やっぱり、イクトだったんだね。あたしが待ってたの」

ゆっくりと、影が亜夢に近づいてくる。そうしてはっきりと、幾斗の顔が見えるほどに。

「俺は、知らなかったけど。あむが、ずっと俺を待っていてくれてたなんて」

くす、と口元を綻ばせて幾斗が言えば、亜夢は少し頬を赤らめて俯いた。

「そりゃ……。本人には、言えないよ。は、恥ずかしいじゃん」

「……好きだから？」

「え？」

亜夢が顔を上げた瞬間、柔らかな抱擁が亜夢を包み込んだ。恥ずかしいのに、すごくほっとする。

この腕の中にいると、安心できる自分がいた。記憶がなくても、わかる。幾斗の言うことは、当たっている。

(あたしはきっと、イクトが好きだったんだ……)

全神経が、幾斗を欲しているから。身体中が、幾斗に触れたい、とそう言っている。もうこれは、欲望という名の本能でしかなくて。

「記憶があるときに、言ってほしかったな」

ふ、と笑いながら、幾斗はそう言う。それにムツとしたように、亜夢が頬を膨らませた。「記憶がなくなつて、あたしはあたしだよ。記憶がなくなったからって、あたしじゃなくなるの？」

「まさか」

桃色の髪を撫で、幾斗はそこにキスを送る。

「俺が知ってるあむは、意地っ張りで、天邪鬼。思ってることの半分も口にできない、我儘なお姫さま」

「……どこがよかったの？」

幾斗の言葉に脱力して、亜夢は思わず聞いてしまった。顔色ひとつ変えずに、全部、と幾斗は言って微笑む。

「意地っ張りで天邪鬼。思ってることの半分も口にできない我儘なお姫さま。だけど、俺にしか見せない、かわいい顔も持ってる」

まっすぐに見つめられて、亜夢は頬が熱を持つてくるのがわかった。今のは、本当に亜夢に向けられて言葉なのだろうか。

ストレートにぶつかってくる幾斗の言葉が、すごく嬉しい。でもそれと同時に、すごく恥ずかしくて。

「記憶がなくなつて、何度だって俺に惚れさせる。俺なしじゃ生きていられない身体に、してみせる」

「……もう、とっくだよ」

ぼそっと呟いて、亜夢は幾斗の肩に顔を埋めた。

「もうとっくに、骨抜きにされてる」

亜夢が呟いた言葉に、幾斗は思わず嘖き出してしまった。やっぱり、かわいい。何度でも、こうして恋に落ちてしまう。

意地っ張りな亜夢も。天邪鬼な亜夢も。思ったことの半分も口にできない亜夢も。全部含めて、亜夢だから。そういう亜夢に、幾斗は惹かれたのだから。



「なんか。嬉しそうだね、イクト？」

隣に並んで街を歩く幾斗は、ずっと笑みを絶やさなくて。亜夢は、そう問うた。

「まあな。あむと、こうして手を繋いで歩けるから」

繋いだ手を少しだけ上に挙げて、幾斗は微笑む。

「手、とか。繋いで歩かなかった？」

「恥ずかしがって、繋いでくれなかった」

「そうなんだ」

でも、と亜夢は思ったことを口にする。

「きっと、ずっと繋ぎたかったはずだよ。だって、繋いだ手の先から、幸せを感じるもん」

「……」

不意打ちに言われる亜夢の言葉が、慣れなくて。幾斗は、思わず亜夢から顔を背けてしまった。これはきっと、お姉ちゃんキャラがなくなってしまった亜夢なのだろう。妹ができて、お姉ちゃんだから、と自分に言い聞かせて。

人に甘えることを忘れてしまった亜夢。本当はずっと、こういうふうに甘えたかったのかもしれない。

「あむ、もう少しこっちを歩けよ。そこ、電柱……」

「こーんなどこでいちゃついてんじゃねえよっ」

「!？」

幾斗の言葉の途中で、亜夢は、どん、と背中を強い力で押された。その反動で、目の前にあった電柱に、またもひどく顔面をぶつけてしまう。

「あむっ！」

慌てて、幾斗はその場にうづくまる亜夢の肩に手を置いた。頭を押さえて、亜夢は空海を睨む。

「なにすんのよ、空海っ！」

「……え？」

幾斗は、目を丸くした。

「あっはは。悪い、悪い」

「悪い、じゃないっ」

「……あれ？」

歌唄も、幾斗と同じく目を丸くする。

「あむ、もしかして……。元に戻った？」

「はあ!？」

歌唄の言葉に、亜夢は顔を顰める。

「あむ、手繋ご」

幾斗がそう言って手を差し出せば、あからさまな拒絶が待っていた。

「や、ヤだよ。恥ずかしいじゃん！」

「……」

あれほど甘えてきた亜夢は、一体どこに。がく、と肩を落とす幾斗に、亜夢は訝しげな目を送った。

「ま、まあ、よかったじゃねえか」

幾斗の肩を叩いて、空海がそう言う。

「ちっともよくないっ」

納得ができない、と言わんばかりに、亜夢が空海を睨む。そんな亜夢の頭を撫でて、幾斗は優しく微笑んだ。

本当は、ずっと甘えたかったんだ、という亜夢の本質が見えた。今回の記憶喪失は、幾斗の亜夢への気持ちを再確認させる、いい機会だったのかもしれない。

お姉ちゃんキャラの亜夢も、そうでない亜夢も。全部が、『あむ』だから。

何度でも、きっと恋に落ちる。離れたら生きていけないほどに。

失っても残るもの■END

しゅごキャラ！二次創作

失っても残るもの

はなび

E-Mail hanabi7220@gmail.com
URL <https://lycka.cocotte.jp/871/>
Twitter @hanabi7220

- 本書は非公式ファンブックです。原作者さま、出版社さまとは一切関係ございません。
- 本書を無断で複写、転載、転売、オークションで出品等をするのはご遠慮ください。

おうちでつくる同人誌

<https://cweb.canon.jp/pixus/special/room/doujin/>